

日本哲学会林基金若手研究者研究助成
成果報告書

研究課題名：ハイデガーによるアリストテレスを中心とした古典の解釈とその現代哲学の諸相との関係の研究

神谷 健

本研究では現代哲学の諸相と関係づけることを視野に、ハイデガーの哲学を主に論理的観点からアリストテレスを中心とした古典との関係において理解する一つの基盤を用意することを試みた。

本研究では先ず「ナトルプ報告」(NB)について、σοφία と φρόνησις の解釈と関連するアリストテレスのテキストの対応関係を精査した。この作業から、ハイデガーがそこで σοφία と φρόνησις の論理的形式を問題としており、実践の状況に関する一見すると論理とは無関係そうに見える記述も φρόνησις の論理的形式としての実践的三段論法の翻訳となっていることがわかった。ハイデガーは φρόνησις のこうした推論的な働きを「世界との配慮的交渉 das besorgende Umgang mit der Welt」と呼んでおり、こうした実践的三段論法の読解が、後の環境世界分析の原型となっていると考えられる。

φρόνησις の論理的把握は NB の約二年後に実施された 1924/25 年冬学期講義「ソピステス」(SP) でより明確になる。そこでは、φρόνησις の遂行様式とされる λογίζεσθαι としての βουλευέσθαι に際しては συλλογισμός が働いていることが強調されているが、ここで λογίζεσθαι は「配視的討議 umsichtiges Durchsprechen」と訳されており、配視として捉えられた φρόνησις の働きが、三段論法の構造を具えたものとして考えられていることが窺われる。ハイデガーはまたよき βουλευέσθαι に属する βουλή を「決意 Entschluß」「決意していること Entschlossenheit」と訳し、「正しい決意性 rechte Entschlossenheit」は「行為の透明性 Durchsichtigkeit der Handlung」として「具体的状況の彫琢」においてその確保が目指されるとしている。この時期のこのような記述が、決意性における状況の開示といった SZ のテーマと無関係であるとは考えづらい。こうしたなかでハイデガーがさらに φρόνησις の論理的構造の主題的整理にまで踏み込んでいることは、配慮的交渉・配視・決意性といった諸概念が実践の論理的な把握と密接に結びついたものであることを裏付ける。彼はこのような推論において働いている諸事実の把握を、「配視的な眺めやり umsichtiges Hinssehen」と呼ぶ。φρόνησις はこのような αἴσθησις として「そのつどの具体的なものの瞬・視 Augenblick である」とされ、この瞬視は σοφία の「常住 Immersein」と対置され、この区別の時間性が強調されている。

状況と決意性の連関に引き続き、瞬視と状況、時間性の連関がこの時期の講義で立て続けに現れていることが偶然であるとは、俄かには信じがたい。関係の内実の解明には SZ とのさらなる詳細な比較検討を要するであろうが、少なくともハイデガーがここで行って

いる、論理的な構造を持つものとしての φρόνησις の把握と一体的なこうした議論が、SZ の関連議論の根底にあることを疑うことは難しい。

SZ そのものに目を向ければ、「配慮的交渉」は πράξις の訳として用いられている (SZ 68)。ここで念頭に置かれているのがアリストテレスの πράξις を巡る議論であると想定することは妥当であろう。また SZ の環境世界分析の全体がそこから、またそれに基づいて展開されている基軸を成しているのは、いわゆる道具についての議論であるが、この「道具」というのは、πράξις の対象としての πράγματα の、ハイデガーによる解釈である (SZ 68)。なおこれらは SZ での「配慮的交渉」と「道具」という語の最初の登場であり、これを説明する形で道具の分析が直後に展開されているのであるから、道具分析、延いては環境世界分析全体は、πράξις とその πράγματα の解釈であるとも解せるであろう。道具分析の詳細な検討から、その内実は NB や SP において翻訳的に再構成された実践的三段論法と同様の構造を備えているものと理解することができる。

以上を踏まえ、環境世界分析をいわば変奏された実践的三段論法、究極的目的を原理とした推論体系としての実践理解、より一般的には原理に基づいた論理的体系による人間の知性や行為の把握という、古典的でも現代的でもあるプロジェクトのヴァリエーションと考えることができる。これは、初期以来のハイデガーの哲学的方向性と符合する。最初期のハイデガーは論理学に関する研究に勤しみ、初期フライブルク期やマールブルク期の最初の諸講義の主題は、論理を支える原理をいかに捉えるべきかという問題である。日常性から出発し、理論的なものの優位に抗するという、後の現存在分析に繋がる我々の非理論的なありかたのそこでの主題化は、このような原理や我々のそれとの関わりに迫るためのものとして位置づけられている。これに応じて、環境世界分析は、論理的体系の原理への我々の関わりに対する最初期以来の関心が、実践的三段論法の解釈を介して、実践のうちで働く論理と、その原理に当たる究極的目的への現存在の関わりへの分析へと発展したものとして理解することができる。

報告者は以前より現存在分析が現存在の世界との意味論的な関わりへの解明としての側面を持つことを強調しているが、こうした関わりが推論的構造をベースに理解されるとすれば、これはハイデガーの哲学が一見するよりも遥かに現代哲学の議論領域と重なる部分を持つことを意味している。ハイデガーの議論を現代哲学の諸相とさらに立ち入った形で接続する発展的な議論は今後の課題となるが、同氏の主著の基礎的な枠組みを提供している環境世界分析の語彙と構造について、アリストテレスの実践的推論との対応関係を生成史的に明確化できたことは、こうした作業の一つの基盤になるものと思われる。